

令和7年度の教育の実施状況について、以下に報告する。

I. 教育課程・教育活動の充実について

重点目標の今年度の方針・目標は以下の2点である

1. 専門職業人として主体的に考え判断し、責任をもって行動する力を育成する。
2. 他者と協働しながら目標を達成する力を育成する。

1) 年次別教育課程

教育課程に基づき計画どおり実施できた。

1年次	第56期生	41単位	1,125時間	(うち実習 2単位 90時間)
2年次	第55期生	37単位	1,095時間	(うち実習 8単位 360時間)
3年次	第54期生	23単位	810時間	(うち実習 13単位 585時間)

2) 講師依頼・実習施設状況

講師の協力のもと計画通り授業を終えた。依頼した講師の総数は143名。新講師35名、特別講義講師は9名である。

今年度から、臨地実習時間を、従来の60分1時間から45分1時間へ変更し、全学年の実習期間短縮とし、学内実習においてリフレクションを取り入れ、体験の意味づけを意識した実習展開となった。

3) 学生の指導状況

① 1年次学年目標:看護学校の生活に適応し、看護者として望ましい態を身につけることができる。

「看護者として望ましい態度」とは具体的にどのような態度であるのか、自分の行動や発言が周囲に与える影響を考え、場に応じた行動がとれるよう、具体的に提示しながら指導した。初めての病院実習の前に、場に臨む姿勢や態度の理解をねらいとして、看護におけるコミュニケーションの講義の一部を外部講師に依頼し、「実習におけるマナーや接遇」についての講義を実施した。

<基礎看護学実習Ⅰ>今年度は、看護活動の理解と援助者としての態度の強化を目指し、目的・目標の見直しを図った。受け持ち患者に対する日常生活援助に責任を持てるよう、基本的看護技術の進捗を調整した結果、多くの学生がバイタルサイン測定、スタンダードプリコーション、環境整備等を経験することができた。さらに、患者に行われている看護活動に関心を寄せようとする姿勢も見られた。また、実習に臨む姿勢については、「マナーや接遇」の講義の成果もあり、指導者から高い評価を得ていた。一方で、指示に従って行動する傾向も見られることから、場に応じた振る舞いに加え、体験の意味を考えるなど、思考力の育成に向けた支援が必要である。

<地域・在宅看護論実習Ⅰ>各実習施設で積極的に対象者と関わり、地域生活の主体は本人であること、地域の中で「その人らしく暮らすこと」への支援の必要性を学んでいる。また、それぞれの場において、関わるうえでは、コミュニケーションが極めて重要であることを学んでいる。

② 2年次学年目標:対象の状況に合わせた看護実践を責任をもって取り組み、看護に対する自己の考えを表現することができる。

看護者として学習責任を果たし、場に臨む姿勢づくりを意識してスタートした。臨地実習前後には、実習状況に合わせ、実習の振り返りや看護を語るなど、担任が学科外教育活動を展開した。実習体験から対象をどのように捉え、「対象にとって必要な看護」を責任をもって考えていけるよう、自己評価しながら次の実習に向け目標をもって臨むよう支援した。

<基礎看護学実習Ⅱ>実習期間は昨年より1日短い5日間とし、実施時期も昨年より1週間早めて実施した。あわせて目的・目標・内容を見直し、「患者の全体像ワークシート」を導入。患者のニーズの充足状況と必要な看護について考えられることを期待した。1年次から実習時期が空いたため、主体的に参加するというより、見学意識の強さや、ワークシートを埋めるための情報収集となる学生の姿も垣間見えた。場に臨む態度として、言葉づかいや振る舞いで指導を受ける学生や学習姿勢など、看護者としての責任の自覚に課題のある学生もいた。患者への関心を向け、目標を共有できるよう、日々の実践過程の支援とリフレクションを強化しながら次年度に繋げていく。

<基礎看護学実習Ⅲ> 目的・目標は変更せずに、評価項目の看護者として望ましい態度の配点を高くした。基礎看護学実習Ⅱの状況を踏まえ、患者の目標を意識しながら看護過程の展開ができるようオリエンテーションを行った。更に、アセスメントにかかる時間の短縮と、記録を整えることに終始しないよう、行動のアセスメントの情報入力を簡略化した。しかし、初めての看護過程展開の実習であり、記録の整理など自分の目的に向かってすべきことに集中し、患者の反応に意識が向きにくい状況もあった。また、インシデント発生も8件と多発した。患者の病態から必要な看護を考え、安全な援助を行えるよう支援していくためには、学生の患者理解を早期に把握し、学生が見聞きしている事実を確認しながら、知識や根拠に戻り、患者にとっての看護を考えていけるよう支援する。併せて、実習前のオリエンテーションで、看護技術ガイドラインや起こりやすいインシデントなどの説明を強化する。

<小児看護学実習Ⅰ> 帯広市保育所7か所、私立保育所12か所、子育て支援センター6か所で実習。5日間と実習期間が短縮となり、子どもの成長発達を理解に視点を置き、目的・目標を変更した。短期間ながらも、子どもの成長発達の力と支える環境づくりの大切さや、子ども一人ひとりを尊重し、自立心や意欲を育む姿勢を学んでいる。子育て支援センターの実習では、様々な利用目的があり、子どもにとって安全に遊べる場としてだけでなく、保護者にとっても安心できる場であることを学び、子どもとその家族の成長発達を支えるための連携や支援の必要性を学んでいた。反面、保育所・支援センター共に、緊張感が高く消極的、流動的な子どもへの対応が苦手な学生も増えてきた。また、接遇や実習態度に苦言を呈された学生もおり、次年度も事前のオリエンテーションを工夫し意識づけできるよう働きかけていく。

<成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ> 実習時間の変更に伴い、病棟9日間、学内実習1日計10日間の実習展開である。成人看護学実習Ⅰは、昨年度の評価から1週目のシャドウイング実習を行わず、1日のみ手術室実習としたため、受け持ち期間に変化はない。成人看護学実習Ⅱは、9日間となり昨年度より3日間受け持ち期間が短縮した。成人看護学実習Ⅰでは、周手術期の患者を受け持つため、観察に精一杯となる傾向がある。そのため、周手術期における患者の身体状況を予測し、必要な援助を考えられるよう、患者の目標を意識させるとともに、日々の援助の意味づけを丁寧に支援していく必要がある。成人看護実習Ⅱでは、自立度の高い患者を受け持つことも多く、患者の状態に応じた援助の必要性を理解し、日々の援助を判断し実施するにはかなりの支援を要している。患者の入院目的を捉え、日々の援助の意味づけを丁寧に行いながら、患者にとっての看護を思考できるよう支援していく。両実習共に、「看護者として責任ある行動」や「望ましい態度」において、患者のために思考し実践していくプロセスに支援が必要な学生も多くなっている。今後は、看護者として患者への看護実践に必要な学習責任を果たし、計画・実施・評価の一連のプロセスを踏めるよう、働きかけていく必要がある。各看護学のシミュレーション演習では、昨年度の評価と実習短縮の状況を踏まえ、より臨地に即した状況設定を意識し、学生の臨床判断能力の積み上げを意識し進めた。また演習が重なるため、多重にならないよう各演習の進捗を調整し進めた。患者理解や思考過程の積み上げをねらいとしたが、安易に生成AIを活用しそのまま提出する学生も増えた。この時期のシミュレーション演習の目的の理解や、生成AIの活用方法について、改めて学生へのオリエンテーションが必要となった。

③3年次学年目標: 専門職業人としての責任を自覚し、主体的に役割発揮するための態度を身につける。

専門職業人として社会にでる構えをもち、多様な場における対象者とその家族に必要な看護を考え、実践できる能力を積み上げる最終年次である。全ての臨地実習において実習期間が短縮された。そのため看護観の育成において、各専門実習の看護体験の意味づけ、学内でのリフレクションがより重要となった。例年同様に、4月に看護観、7月にケーススタディ作成、国家試験後に看護倫理、卒業シンポジウム、看護を語る会、卒業企画を企画し、卒業時には各々が自己の看護観を述べ築立つことができた。

<老年看護学実習Ⅰ> 急性期病院である帯広厚生病院で2週間の実習。病棟実習10日と1日学内の実習展開である。例年、治療の経過や患者理解に時間がかかるが、今年度は、よりタイムリーなアセスメントと、主体的に実践していく必要に迫られた。しかし、患者の看護方針の理解や全体像の把握、必要な看護を思考するのにかなり支援を要した。日々の患者との関わりでは、患者の反応に立ち止まり確かめる行動には至らず、患者理解が進んだ頃に実習が終了してしまう状況であった。2週間という短期間で患者に合わせた看護を展開するには、援助の目的や判断したプロセスを学生が理解できるよう、思考発話を意識し

「看護師のように考える」プロセスを支援していきたい。

＜老年看護学実習Ⅱ＞全員が地域包括ケア病床等をもつ病院（協立病院、第一病院、公立芽室病院のいずれか）で実施できた。3 病院の受持ち患者は、入退院を繰り返し慢性的に経過している患者や、急性期治療を終えて地域への移行を目指す高齢者であった。多職種との連携場面やチームカンファレンスへの参加が、看護の方向性や患者理解に繋がった。しかし、変化の少ない高齢者の目標を考えることは難しかったが、患者に合わせた援助をチームへ相談することで考えることができた。しかしその考えたことを主体的に実施し、評価・修正していくには日数が足りず、あともう少しのところまで実習が終了してしまう状況も生じたため、実習開始から場への適応と、早期に患者理解が進むよう、チームに積極的に関わり考えていけるよう支援する。

＜小児看護学実習Ⅱ＞実習期間は 5 日間に短縮、評価表の一部を修正し実施した。急性期や周手術期の児で、受持ち期間は約 3 日間であった。幼児期にあり、周手術期の患児の受持ちが多かった。病態や症状の観察は出来ても、必要な援助と繋がりにくく、患児の苦痛には目が向きにくい状況であった。指導者と場面を共有し振り返りをすることで、援助の意味づけができていた。また、実習期間短縮に伴い、NICU 実習を実習 2 日目と 4 日目に計画したが、短い受持ち期間が更に途中で中断されるため、次年度は 1 日目と 5 日目に戻して計画する。日々の観察だけにならないよう、次年度も指導者に協力を仰ぎながら支援していく。

＜母性看護学実習＞実習期間短縮に伴い、産科外来 1 日、新生児 2 日、産褥 4 日、地域 1 日の実習展開となり、新生児の実習内容と評価表を変更した。分娩期体験は 65%、帝王切開分娩への体験者が増えている。短期間で日々変化する心身の状態を捉えていくことに時間を要し、対象に合わせたコミュニケーションも難しい状況もあった。しかし、丁寧に指導を受けながら、対象理解と看護活動の理解に繋げることができた。地域実習では、母子の生活の理解、看護の継続性、多職種連携の重要性を学んでいる。今年度、確認不足で実習場所を誤った学生もおり、オリエンテーション内容を検討する。

＜精神看護学実習＞実習期間短縮に伴い、病棟実習が 5 日間、地域実習 2 日間、学内実習 3 日間となった。病棟では 1 名の患者を前半・後半に分けて 2 名の学生で受持つペア実習を開始した。地域実習は、あうとりーち十勝での実習が終了し 2 施設での実習となった。対象理解では、精神症状に目が行き、患者の訴えや反応に立ち止まることが難しく、報告・記録・相談に繋がらない状況があった。指導者が援助場面を共有し、丁寧に意味づけをしてくれることで、患者の反応の意味の理解に繋がった。また、患者に合わせたコミュニケーションがとれず、患者のペースに合わせて関われない学生も増えているため、プロセスレコードの活用や、関わりの振り返りを丹念に行いながら、患者に応じた対応が取れるよう支援していく。地域実習では、1 施設減となり、生活支援、多職種連携場面の見学の機会が少なくなったが、スタッフの意図的な説明（行政との連携、サービス利用、地域生活支援など）の説明を受け、理解が深まっていた。次年度は更に「稲田館」での実習が終了し、「生活支援センター」へ移行する。それぞれの事業所でのサービスの意味づけができるよう、オリエンテーションや学内での学びの共有を強化する。

＜地域・在宅看護論実習Ⅱ＞実習期間を短縮し、訪問看護ステーション 4 日、介護保険施設 2 日、包括支援センター 3 日の実習となった。訪問看護ステーションでは、訪問事例の情報を得る時間が少ないためアセスメントは難しいが、指導者から訪問目的や援助の必要性について説明を受けることで生活を理解する必要性を学んでいる。しかし、短時間の訪問の中で自分たちの目的で情報を得ようとするため、対象者に目が向けられるようオリエンテーションの工夫やリフレクションなど支援が必要である。介護施設は、実習期間が半減したものの、施設指導者の丁寧な説明や振り返りの時間をとおして、施設サービスの特徴や役割については概ね理解することができた。地域包括では、実習内容を基本事業の理解に重点を置いたため、実習期間減にも関わらず、得点率は上昇した。実習プログラムを調整していただいたことで、センターの基本事業や役割について理解することができた。次年度も、オリエンテーションや学びの振り返りを意識し、場に応じた行動がとれるよう支援していく。

＜統合実習＞帯広厚生病院、帯広第一病院、協立病院、公立芽室病院、十勝いけだ地域医療センターの 5 病院で実施。病棟実習が 10 日間に短縮となったが目標は変更せず、受け持ち患者への責任を理解し、多重課題と優先順位の判断、特に時間管理の重要性の理解に重点を置いた。3 年次開始から実習期間が短縮し、受け持ち患者の看護をタイムリーに実践する力は全体的に低下した。コミュニケーション能力

の低下もあり、患者・家族の状況を総合的にアセスメントすることが難しく、個別的な介入計画立案や、日々の援助に繋げていくプロセスにも支援を要する状況であった。実習期間を短縮した中、統合実習までの間に、チームメンバーの一員として患者の看護に責任を持つ行動を積み重ねていけるよう刺激していく必要がある。

④基礎看護技術の修得について

実習期間が短縮したが、技術経験状況は大きな低下はなく、一定の経験状況は確保できた。3年次は、老年実習における実習病院の協力のもと様々な患者の援助へ参加することができている。1年次は、看護技術の学習進度を早めて基礎実習に臨んだため、日常生活援助技術に一部参加ができ、経験率が上昇した。臨地での体験が少ない技術に関しては、学内演習における経験度も重要である。しかし、演習で必ずしも全員実施とならない技術もあり、演習の組み方の検討や、事後学習で体験できるよう工夫している。実習状況では、患者に状況に応じた援助の実施が難しくなっている。日々、指導者と調整を繰り返しながら、学生が意識的に経験を積めるよう支援していく必要がある。

⑤インシデント・アクシデントについて

発生総件数は14件、アクシデントはない。年次別では、3年次3件、2年次11件と2年次の発生件数が多かった。内容別では、【療養上の世話】6件、【診療の補助】1件、【その他】7件である。【療養上の世話】では、「転倒・転落」が4件で全て2年次で発生し、単独実施であった。「その他」は、3年次が2件、どちらも患者の治療の理解と患者の身体状況の予測が不足し単独実施となっている。【その他】7件は6件が2年次、1件が3年次である。2年次は「報告の遅れ」が多く、「知識不足」から大丈夫だと思い報告しない、報告そのものを忘れていた状況もあった。「記録・報告」では、メモの置忘れや金銭の仲介、患者を怒らせる態度をとったなど、場の状況を理解した行動がとれないことによって起こっている。2年次早期の実習でのインシデントが多数発生しているが、知識不足や経験不足から、患者に起こる影響を考えられないこと、指導者へ積極的に声をかけ、調整する行動をとれないことも要因として考えられる。次年度は、学生が責任をもち、患者にとって安全安楽な援助の実施ができるよう、指導者との調整や場面共有など協力を依頼し、実習開始前のオリエンテーションの内容も検討していく。

II. 学習への適応促進

1. 学生の主体性と学習の推進を目指した支援

○学習方法・学習習慣の確立

○目標を持ち取り組めるよう支援

昨年度同様に、「課題の受けとめや対処行動等、学生個々の反応への関心を高め、早期の状況把握を心掛ける。教務室内での情報共有」を目標とし支援した。

1)1年次: 学生在籍状況 学期開始時45名、学年末45名。

入学時から、学習方法や試験後の学習支援など、折に触れ担任団がタイムリーに支援した。今年度から入学前学習にeラーニングを導入したため、入学前から取り組み状況が把握でき、入学後もeラーニングを活用しながら、学習方法・学習習慣の確立を目指した。教科書は電子テキストとなり、iPadのノート機能の活用など効果的に学習に繋がるよう支援した。電子テキストへの変更は、学生には概ね高評価であり、技術の学内演習時など、電子テキストを開いて確認しながら進める様子も見られ、学生達の準備性や学習の振り返りなどには効果的であったと判断する。また、昨年度年度の評価から2科目を他学年に移行させ負荷を軽減した。時間外で取り組む必要のある演習について、学科外活動として時間割で計画したが、次年度は自分達で見直しをもって主体的に取り組んでいくよう刺激していく。

2)2年次: 学生在籍状況 学期開始時46名、学年末41名、退学3名、休学2名。

講義・演習・実習と多重課題になるため、演習が立て込まないよう進度を調整し進めた。年度当初から学習に時間をかけない学生、自己認知の甘い学生など、担任が授業態度や学習成果に応じて面談を行うなど支援してきた。臨地実習が始まっても、学習不足など看護者として責任ある行動に課題が多い学生もおり、看護実践者として、学習を積み上げていく責任や姿勢が持てるよう、支援していく必要があった。後期

の専門分野の演習では、生成 AI を安易に使用しレポート作成している様子もあり、看護師として主体的に考え学ぶことの重要性を伝え、自分で取り組む姿勢について投げかけを行っている。

休学者は、1名は看護師になることへの不安が生じ、1年次修了とともに休学に入った学生である。もう1名は、基礎Ⅱから再実習を繰り返してきたが、成人実習の再実習の評価が通らず、自己課題の整理のため休学に入った。退学者は、1名は昨年度休学し復学した学生であったが、やはり看護師に向かう意志を持って進路変更となった。2名は、実習評価が通らず、看護師への適性を考え進路変更を決定した学生である。

3)3年次: 学生在籍状況 学期開始時 43名、卒業 42名、退学 1名

実習期間が短縮されたことで、学内での実習準備やリフレクションなどへの支援が必要であった。学内での学習時間が確保されたことにより、早期から国家試験対策などの学習に取り組む学生もみられた。しかし、体調不良などにより講義や学内学習の欠席や欠課がみられ、生活状況の確認、支援が必要な学生もいた。1年間の見通しを持ち、実習にあわせた学習計画を立案できるよう、年度当初のオリエンテーションから、その都度時期に応じて支援した。

退学者 1名は、実習中に看護師となることに困難を感じ、実習継続が困難となり進路変更した。

Ⅲ. 国家試験全員合格

1. 学習支援計画と要支援者への確実な支援

- 学生の計画的・主体的な取り組みの支援
- 要支援者の早期からの継続的な支援
- メンタルサポート

1)1. 2年次

1年次は、入学前確認テスト、入学後は4月と3月に模試を受験。eラーニングの模試の振り返り機能を活用し、主体的に学習できるよう刺激した。初めての解剖生理学の試験結果から、学習支援を行っている。2年次は、4月に年間学習計画のガイダンスから、臨地実習や専門分野の演習に対する見通しを持ち、目標を共有しスタートした。実習終了後の12月に3年次生が受験した必修模試に取り組み、併せて国家試験の概要について説明を行った。その上で国家試験や実習の事前学習への活用方法を説明し、3年次に向けて主体的に学ぶ土台づくりを図った。2月には低学年模試、3年次生が受験した国家試験問題の解きなおしを行い、国家試験への学習に向け意識づけを図っている。両学年共に、模試の成績や学期末の学科成績から、下位の学生を抽出し、春期休暇中の学習支援と、保護者面談を実施した。欠席・欠課が多い、学習成果物の提出が整わないなど、メンタル面で心配のある学生は、担任団が早期に把握し、カウンセリングや専門機関への受診、保護者への連絡や共有など、サポートしながら、学習に取り組めるよう支援した。

2)3年次

実習期間を短縮したことで3年次の臨地実習修了時期が例年よりも早くなり、12月初旬から国家試験の学習に集中することが出来た。4月の学期開始時に学習計画を説明し、実習と講義期間の進度のイメージ化を図り、学内期間の学習の進め方を共有した。模試は全員が全4回受験。1月は、実際の国家試験会場での受験であり、会場の雰囲気や本番のイメージ化に繋がり緊張の緩和に繋がっている。また、模試の成績から下位の者を抽出し、要支援者には、学習進捗状況の確認と解きなおしの支援を行い、個別に対応した。学内教員による補講も実施し、学生の弱点科目の底上げを図った。2月には専門業者による学内講座も実施した。学生の基礎学力の低下や思考力の低下から、問われていることの意味を考えずに答える学生や、メンタル面での支援など状況は多岐に渡っている。特に設問を確実に読み解くようにするための支援には、かなりの労力と時間を要している。各年次の実習指導を切れ間なく担いながらの学習支援は、担任だけでなく、教員が一丸となって取り組まなくてはならない状況である。

国家試験受験者は43名、全員合格100%である。全国の合格率は88.3%(新卒者合格率94.1%)、合格基準は必修問題40点以上/50点、一般・状況設定問題は166点以上/249点であった。今年度全般に難易度は高くないが、性に関する問題や災害看護に関する出題が増えた。必修問題は半数程度が過去問からの出題であったが、過去の一般問題が必修として出題されていたり、一般問題では、長文問題が増え

ていたり、過去問の丸暗記だけでは対応できない状況であった。昨年度同様に診療の優先度を問う問題や多重課題への対応など、臨床に即した知識を問う問題も出題されている。実習体験と併せて「何を問われているのか、何を判断するのか」を考え、解いていける力を積み上げていく。

IV. 学生相談・学生指導の充実

1. 学生のメンタルヘルスとセルフケアの支援

○保護者との連携を強化する。

カウンセリングを受けた学生は各学年で延べ5名。1年生1名、2年生3名、3年生1名であった。相談を受けやすい体制づくりを目指し、学内ポスターの変更や学生への呼びかけを変更したが、カウンセリングを受けた学生は、担任からの打診であった。今後もそれぞれの学年で相談を必要とする学生の把握をしながら、タイムリーに支援できるよう努力する。更に、今年度は2名が専門医への受診に繋がった経緯があった。カウンセリングだけでなく、専門機関受診の必要性の判断など、保護者と情報共有や連携を図りながら、学生達が必要な支援を受けられるよう調整していく。年々、入学前から受診歴や内服履歴のある学生が増えている。入学後の学習への適応や取組状況から、早期に対応することが必要である。それと共に、学生自身が専門職を目指す者として、セルフケア行動やセルフマネジメントできるよう、支援していく。

2. 主体的な進路決定と責任ある行動の支援

進路状況

就職 38名 (90.5%)、十勝管 38名

進学 4名 (9.5%)

年次の状況に応じて、進路選択や進路決定に向けた指導を実施した。

1年次では、例年同様に5月の個人面談の際に、看護学校選択の理由など確認し、学習への適応を支援している。また、病院の奨学金受給者も多いため、進路決定した自覚と責任を指導している。

2年次は、実習終了後の12月に進路ガイダンスを実施。進路の手引きを配布し、進路のスケジュールの説明を受け、進路決定における情報収集の視点など理解し、冬期休暇明けには自分の進路について考えることができた。既に病院の奨学金受給者が多く、進路が決定している者も多いため、自分の目指す看護師像を明確にし、3年次に目的をもって実習に取り組めるよう刺激している。就職試験が全体に早まっている状況もあり、インターンシップへの参加時期やアポイントの取り方など、進路の手引きを上手く活用して、自らのこととして主体的に行動を起こせるよう、進路の手引きの内容をブラッシュアップさせ、活用できるようにしていく。

3年次は、4月に主幹、5月に担任による進路ガイダンスを実施。履歴書やエントリーシートの志望動機には、実習体験から看護観や自分の学びを表現できるよう刺激した。また、相手のスケジュールを意識した行動がとれるよう、見通しをもって取り組む必要性も伝えている。一部の学生に、奨学生という立場を理解していない行動が見られたが、自己の負う責任や、周囲に与える影響について確認し合い、行動の修正が図れた。就職試験に必要な履歴書など、自分で考えずに教員の手直しを期待し提出してくる学生もあり、就職試験に対する構えや自己の責任について再度伝えながら進めた。次年度も、主体は自分であり、自己の責任で取り組んでいく構えづくりを、年度当初のオリエンテーションから強化していく。

今後に向けて

カリキュラム施行5年目となった。実習時間・期間の短縮に伴い、看護実践能力をどのように培っていくのか、大きな課題が残る1年となった。少子化や看護職を目指す高校生の減少から、入学定員を確保するため指定校枠の増員など図ったが、基礎学力や学習推進力の低下が如実な状況である。学生一人一人の支援にかかる時間も増えている。学生達が看護師になるプロセスを支援していくには、相当の支援が必要な状況となった。近年、学生達の生成AIの使用頻度も増えてきており、学生達の思考力の低下も危惧するところである。教材を効果的に活用しながら、今の学生達にどのような教育活動が効果的であり、看護師としての土台づくりができるのか、学生の状況に応じた教育活動を模索しながら、教育活動に尽力して行きたい。

主 要 経 過

第56期生 < 1 年次 >

担任 岩脇孝導 棚瀬遥

年	月	日	事 項	
令和7年	4	8	入学式	
		10~11	入学時オリエンテーション	
		11	56の会「BeNs説明会」「授業の受け方」	
		25	入学時研修 レクレーションの企画と実施	
	5	28	模擬試験 メディカ出版 看護学生スタートアップテスト	
		7	健康診断	
	6	8	体育大会	
		4	56の会「試験の受け方」	
	7	12	解剖生理学Ⅰ試験	
		17	BeNs「マスターノートを活用した学習方法について第1弾」	
		25~8/17	夏期休暇	
		18~20	前期集中試験	
		16~22	基礎看護学実習Ⅰ	
		20~28	地域・在宅看護論実習Ⅰ	
		17~18	後期中間試験	
		25	看護実践演習開始	
		10	BeNs「マスターノートを活用した学習方法について第2弾」	
		15,19	56の会「技術試験に向けて」	
	令和8年	1	18	「看護学生のたばこ対策」 北海道看護協会十勝支部 今駒里奈先生
			22~1/18	冬期休暇
2		19~22	後期集中試験	
		4	技術試験 全身清拭・寝衣交換	
3		9	56の会「戴帽式に向けて ナイチンゲール誓詞の意味を考える」	
		20	56の会「国家試験対策」	
		24	戴帽式	
		25~27,3/2~5	学年末集中試験	
		6	看護実践演習 シミュレーション実施	
		10	看護技術評価	
	11	メディカコンクール 科目別実力テスト「解剖生理学」		
	12	年金セミナー		
	13	BeNs「2年次の学習にむけて」 特別講義「人間として生きることの尊厳」 北風喜美江先生		
	16	56の会「看護技術GW」		
17	56の会 「看護を語る会」			
	17	1年次修了		

年	月	日	事項		
令和7年	4	7	始業 年間学習ガイダンス		
		9~6/18	成人看護学援助論演習		
		30	臨地実習オリエンテーション①		
	5	2	体育大会		
		7	健康診断		
		8	臨地実習オリエンテーション②		
		12	基礎看護実習Ⅱオリエンテーション①		
		16	技術ゼミナール①（陰部洗浄）		
		19	基礎看護実習Ⅱオリエンテーション②		
		20	技術ゼミナール②（バイタルサイン測定）		
		26~6/2	基礎看護学実習Ⅱ		
	6	10	55の会「実習で出会った患者状況の共有」		
		16	基礎看護学実習Ⅲオリエンテーション①		
		23	臨地実習オリエンテーション③		
		27	基礎看護学実習Ⅲオリエンテーション②		
	7	7~18	基礎看護学実習Ⅲ		
		22	55の会「臨地実習とは何か、援助者としての責任を果たす学習」		
		23	小児実習Ⅰオリエンテーション		
		25~8/17	交通安全講演 夏期休暇		
		18~20	前期集中試験		
	8	9	1~8	小児看護学実習Ⅰ	
			16	成人実習オリエンテーション①	
		22	成人実習オリエンテーション②、55の会「成人実習Ⅰ・Ⅱに向けて」		
		29~10/10	成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ（1クール目）		
		10	23	55の会「成人実習1クール目を終えて」	
		11	4~17	成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ（2クール目）	
			12	17	東京アカデミー必修模試
	令和8年	1	19	19	進路ガイダンス、国試対策
			22~1/18	冬期休暇	
			19~21	後期集中試験	
2			5	個別面談開始	
17			17	メディカ基礎学力到達度チェックテスト	
3		19	19	55の会「国試対策」	
		19	19	特別講義「夢、出会い、感謝～車椅子ママのできること～」	
		26	26	55の会「国試対策」	
		2	2	55の会 看護実践演習/看護倫理①	
		4~5	4~5	学年末集中試験	
	6	6	55の会 看護実践演習/看護倫理②		
	10	10	55の会 看護実践演習/看護倫理③、特別講義「ポッチャ」		
	12	12	看護実践演習/看護技術		
	13	13	55の会「2年生総括」		
	16	16	ケーススタディオリエンテーション		
		17	2年次修了		

第54期生 <3年次>

担任 佐藤舞菜見 佐藤愛美 伊藤由乃

年	月	日	事項
令和7年	4	7	オリエンテーション、進路ガイダンス
		11	特別講義「私の看護観」 長尾志織先生（JA北海道厚生連帯広厚生病院 看護係長）
		14	実習開始（老年、在宅、精神、母性、小児看護学） ケーススタディ開始
	5	7	健康診断
		8	進路ガイダンス
	7	28	第1回全国模試（東京アカデミー）
		23	ケーススタディ論文提出
	8	25~8/17	夏期休暇
		19	必修全国模試（東京アカデミー）
	9	21	国家試験願書オリエンテーション第1段
		24	国家試験願書オリエンテーション第2段
		25	第2回全国模試（東京アカデミー）
	11	5	国家試験願書作成
		5~12/11	統合技術演習
		18~12/3	統合実習
	12	22~1/18	冬期休暇
令和8年	1	12	第3回全国模試（東京アカデミー）札幌コンベンションセンター
		15~2/5	国家試験対策 補習講義
	2	3	特別講義 東京アカデミー国家試験対策学内講座
		15	第115回 看護師国家試験
		21	卒業企画「小中学生向けオープンキャンパス」
	3	25	卒業記念シンポジウム 加藤広美先生（帯広第一病院 看護副部長） 加藤貴子先生（JA北海道厚生連帯広厚生病院 看護師） 佐竹莉歩先生（JA北海道厚生連帯広厚生病院 看護師）
		26	54の会 看護を語る会
		3	卒業式